

## 美人画 麗しきキモノ

太田記念美術館 前期 23. 09. 01～9. 24、後期 09. 30～10. 22 全点展示替え



最新モードをまとった女性を描く「美人画」は、流行を切り取る「浮世絵」において重要であった。

また「キモノ」は、当時の美意識を伝えるだけでなく作品の印象も決定づける大きな要素でもあった。

江戸時代には、社会の安定や各地の産業推進などを背景に、豊かな服飾文化が花開き、様々な服飾品や技法、図案が生み出されるなか、浮世絵師たちは時流にかなった“魅力的な「キモノ」を描くこと”で、美人画の優品を生み出したとされている。

菱川師房 《美人遊歩図》 絹本着色 1688～1704年頃 上図左 前期展示

島田髻を結び振袖を着た女性と、齢若い少女を振り返る立ち姿の二人が描かれているが、女性の帯と少女の振袖にはお揃いの桜花の模様が見られ、遊女の着物にはいくつかの色紙形があって人物風俗が描き込まれている。

歌川豊春 《桜下花魁道中図》 絹本着色 1781～89年頃 後期展示



「豊春」は、西洋の風をはらんだ浮世絵師で、浮絵の普及に貢献し「歌川派」を立ち上げ、確かな風景描写は、肉筆美人画の背景にも生かされ、名所絵と美人画の魅力を兼ね備えた豊かな世界を作った。

画伯は、錦絵では浮家などを数多く手掛けて、「肉筆美人画」にも力量を示している。

本作品は、満開に咲いた桜の下を花魁（おいらん）と禿（かむろ）らが修然と進む花魁道中が描かれ、花魁の打掛に禿の振袖はいずれも黒地に小松模様で、帯の模様や着衣にあしなわれたものである。原色系中心とする華やかな色彩を、打掛に用いられた「黒」が引き締め豪華な画面を創出していて、手前の「禿」だけが、視線を足元に向けており、画面にアクセントを添えている。